

Open access started: "BICHEES II (Report of research on historical sites and Turkic inscriptions in Mongolia from 2006 to 2008 Japan-Mongolian joint expedition project "BICHEES II")

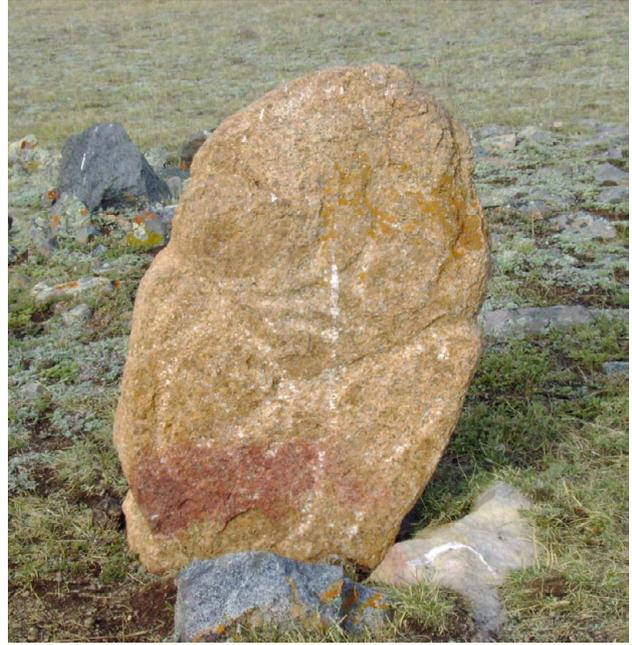
メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: SUZUKI, Kosetsu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00061899

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.





42-2. Ulaan tolgoi-№2 (Улаан толгой-№2)
Malchin, Uvs (Малчин, Увс)



42-3. Ulaan tolgoi-№3 (Улаан толгой-№3)
Malchin, Uvs (Малчин, Увс)

<研究動向> 『ビチェースⅡ』のリポジトリ公開

BICHEES II (БИЧЭЭС II)

ビチェースⅡ：モンゴル国現存遺跡・突厥碑文調査報告

Osaka University Knowledge archive:
<http://hdl.handle.net/11094/26038>



本書はビチェースⅡと題している。ビチェースという単語はモンゴル語で碑文を意味する。その第2弾を称している理由は、1996～98年度に実施された日本・モンゴル合同学術調査「ビチェース(Ⅰ)」プロジェクトを引き継いでいるからである。このプロジェクトは「突厥・ウイグル・モンゴル帝国時代の碑文および遺蹟に関する歴史学・文献学的調査」のことであり、1999年、森安孝夫・A.オチル（責任編集）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』として結実し、後続の研究に影響を与えている。

この初代プロジェクトは国内の複数の文献研究者が協働したものであるが、遊牧民に関係する碑文の新たな拓本やより鮮明な写真を採集することのみならず、遺蹟や碑文が建造された自然景観を踏まえた上、それらが成立した歴史的背景を探求することをも目指されていた。冷戦崩壊後の90年代、旧共産圏は西側陣営の日本人研究者にとって未踏のフィールドであった。遺蹟や碑文一つ一つの現状を精確に把握し、史料批判の材料を提供することが求められていたのである。

ビチェースⅡの調査は2005～07年度に実施されたものである。初代の理念を引き継いだ、古代テュルク遊牧民の言語・歴史・文化を専門とする大澤孝と鈴木宏節が実際の調査と報告書の編集を担当している。従って、本書が扱う遺物は、6世紀中葉から

9世紀中葉にかけての突厥・ウイグルのものに限られている。しかし、両書を通覧すれば、本書が刊行された09年の時点で、取り上げるべき突厥・ウイグル時代の主要な遺跡や碑文をほぼ網羅することができる。一方で本書は、突厥文字で阿史那（アシュナス）の銘文が刻まれたホル・アスガト遺跡のレリーフ付き石槨や、ウランバートルに保管されていた人面碑額付き漢文碑文（ハラーゴル碑文）など、著名な碑文に埋没しがちな史資料の再検討に先鞭を著け、多様な問題点を提起するものであった [大澤孝 2010; 鈴木宏節 2015]。

ところで、モンゴル国における古代遊牧民の遺物、とりわけテュルク系の突厥文字の史資料を網羅しようという試みが00年代に相継いでいる。その最たるものは、2001年、ホショーツアイダム^{ビルゲ・カ}の毗伽可汗^{ガン}遺跡から金銀製品を発掘して世界中の研究者の耳目を集めた、トルコ共和国の国際協力開発機構（TIKA）による悉皆調査である [Sertkaya O. F. et al., 2001]。

次に、中華人民共和国、特に内蒙古自治区の学術機関が牽引する現地調査であり [中国内蒙古自治区文物考古研究所・蒙古国遊牧文化研究国際学院・蒙古国国家博物館編 2008]、現在でも遊牧文化研究所をカウンターパートに継続され、毎年、発掘調査が展開されている。そして、大韓民国も匈奴時代のみならず、草原遺物の全般的な研究調査に積極的である。06～07年に実施された調査は、慶州国立文化財研究所・直指聖宝博物館とモンゴル国国立科学アカデミー考古学研究所が合同で実施したものである [Гёнжүгийн соёлын өв судлалын хүрээлэн, Буддын урлагийн Чигжи сүм музей, 2008]。

また、トルコ共和国とともに、民族の淵源を古代テュルクに求めているカザフスタン共和国の調査がある。オルホンと銘打つ、突厥文字の石刻史料とそれをともなう遺跡を網羅する意図で写真図版集が作成されている [Жолдасбеков & Сарткожаұлы, 2005]。

以上の国家プロジェクト級の成果刊行物に対して、本書が掲載する図版は数量ともに劣ると言わざるをえない。しかし、現地調査を実施するために必要な遺跡の位置情報をGPS計測値で示し、個々の遺跡へのアプローチ方法を具体的に述べた行動記録を全面的に提示した点において、各国の報告書に比べて遜色のないものと自負している。

本書の刊行から十年以上が経過した。新たな関連遺跡や碑文が報告される現状にある。それらと比較すべき基礎的な情報を提供しているのが本書の位置付けと言えよう。リポジトリで公開されているピチェースI、IIともに閲覧され、現地調査の道標になれば幸いである。(鈴木宏節)

文献：

大澤孝 2010「ホル・アスガト (Хөл Асгат) 碑銘再考」『内陸アジア言語の研究』25, 中央ユーラシア学研究会：1-73.

鈴木宏節 2015「唐の羈縻支配と九姓鉄勒の思結部」『内陸アジア言語の研究』30(吉田豊教授・荒川正晴教授還暦記念特集号), 中央ユーラシア学研究会：223-255.

中国内蒙古自治区文物考古研究所・蒙古国遊牧文化研究国際学院・蒙古国国家博物館 [編] 2008『2005～2006年蒙古国古代遊牧民族文化遺存考古調査報告』文物出版社.

森安孝夫・A. オチル [責任編集] 1999『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』中央ユーラシア学研究会. [http://hdl.handle.net/11094/20780]

Sertkaya O. F., Alyılmaz C., Battulga Ts.[eds.], 2001, *Album for the Project on Turkish Monuments in Mongolia. (Moğolstandaki Türk Anıtları Projesi Albümü)*, Ankara.

Гёнжүгийн соёлын өв судлалын хүрээлэн, Буддын урлагийн Чигжи сүм музей, 2008, *Чулуунд сийлсэн эртний нүүдэлчдийн амьдрал болон оюуны соёлын сэтгэлгээ: Монголын хадны зураг, буган хөшөө, гэрэлт хөшөөний хуулга, Гёнжү.* (국립경주문화재연구소・직지정보박물관 『돌에 새긴 유목민의 삶과 꿈: 몽골의 암각화 사슴돌 비문 탁본』 경주. (原題原文ともにハングル・モンゴル語併記)). [国立慶州文化財研究所・直指聖宝博物館 『石に刻まれた遊牧民の生活と夢: モンゴルの岩画、鹿石、碑文拓本』慶州.]

Жолдасбеков М., Сарткожаұлы Қ., 2005, *Орхон ескерткіштерінің толық Атласы*. Астана. [ジヨルダスベコフ М.・サルトコジャウリ Q. 『オルホンモニュメントの全アトラス』アスタナ.]